

生路井

(生路)

むかし、日本の国がまだ統一されていなくて、東国地方で、大和朝廷に、は向う賊軍が勢力をふるっていたころの話です。

景行天皇の命令で、倭建命が東国の賊を征伐に出かけました。途中、尾張氏のもとにしばらく留まって、東征軍の兵力を整えていた時、命は、兵を引きつれて狩に出られました。暑い夏の昼さがり、生路の里を通りかかりましたが、あまりの暑さで、一行ののどがからか

らにかわいてしまいました。

「水が飲みたい。どこかに井戸はないか。」

命が、土地の者にたずねました。

「ここは、ご覧の通りの海辺の村で、これだけ大勢のお方に一度にお飲みいただくような

井戸は、ございませんが……。」

村人は、気の毒そうに答えました。

困った命があたりを見わたしますと、山のふ

もとの崖の下に大きな岩があつて、その下がし

めつてこけむしているところがありました。命

が近寄つて弓のはずを「えいっ」とばかりに突き



▲ 井 路 生

まち濁にごってしまっただいいます。そこで人々ひとびとは、

この井戸いどを神かみの井戸いどとして大切たいせつにまつりました。
今いま、すっかりかれてしまっただのは、惜おしいこ
とです。